

ネルヴァルの伝記を書くことが難しいのは、そこに逆説があるからである。ネルヴァルが自伝的性格をもつ数多くの著作を残していることは知られている。旅行記（『東方紀行』、『ローライ』）、幼年期の思い出、パリ近郊とパリの遍歴記（『塩密輸入たち』、『粹な放浪生活』、『十月の夜』、『シルヴィ』、『散策と回想』）そして最も重要な告白である「オーレリア」の作品が挙げられる。一八五四年にウジェーヌ・ド・ミルクールがジエラルルの最初の伝記を書き、続いて数多くの伝記作者がこれらのネルヴァル作品から、特に恋愛に関わる部分を借用したのである。モリス・バレスは、自分自身の足で『東方紀行』の語り手が結婚をまくろんだドルーズ教徒の娘サレマの足跡を辿って、オリエントまで足を運ぶことさえためらわなかった。しかしながらネルヴァルという生身の人間がレバノンで結婚願望

を抱いた確かな保証はあるのだろうか。ジエラルルと「シルヴィ」に出てくる内気な恋人を混同してはいないか。作家が一人称の「私」を用いて物語るとしても、あらゆる作家は現実生活を自由に解釈することが許されているのだ。それは文学を文学たらしめるゆえんでもあるのだが。

アリスチード・マリーにしても、ピエール・ガスカールにしても、ピエール・プチフィスにしても、信用に値するエドゥアール・ペルーゼさえも、人生を語ろうとする者を魅了するネルヴァル作品の幻惑に抗えなかったのだ。^①〈プレイアード叢書〉の旧『全集』の監修者であるジャン・リシエはなおさらのこと、神祕学に偏りすぎて、全体像をゆがめてしまった。

以下の一例を見れば、我々が危惧することは明らかだろう。伝記作者のピエール・プチフィスの誠実な記述によると、^②

ジェラールの年若い母が病弱だったので、幼い彼はロワジーの乳母のもとに預けられた。モルトフォンテーヌの近くの集落だった。「……」

幼子は、善良な農家の娘のつましい家で、都市の喧嘩を離れ、瞑想するのにふさわしい静けさの中で育った。彼にはもともと「小さなパリっ子」というあだ名がついていて、「グラン・フリゼ」と呼ばれる乳兄弟がいたというところがいしかわかっていない。

ラブリュニー夫人の健康状態についても、幼児が乳母に預けられた事実についても、確かなことは何もわかっていない。プチフィスは乳兄弟を「シルヴィ」の第一〇章「グラン・フリゼ」から出してきた。この章の内容はさもありなん、という感じがするし、実際そうだったのかもしれないが、この乳兄弟が実在したことを裏付ける証言がどこにあるのだろうか。

『東方紀行』を読んだとしても、ジョゼフ・ド・フォンブリードのことは明かされない。この人物は一八四三年の旅でジェラールの道連れだったが、カイロで女奴隷ゼイナブと最初に知り合うことになるのはフォンブリードの方だった。『東方紀行』では、語り手によって買われた女奴隷ゼイナブがレバノンまで同行することになっている。ネルヴァルの伝記で、一八四三年五月二日に彼がカイロからゴーチエに宛てた手紙を提示するのはよしとしよう。その手紙では（『東方紀行』ではジャワ人

となっているところが）「インド人の女奴隷」と記されている。だが、些細という以上の相違点がわかる。女奴隷を買ったのはフォンブリードなのだ。別の例を挙げよう。短編小説「オクタヴィ」^⑤は詩人がナポリに滞在したときの話だ。「オクタヴィ」はまず、一八五三年二月十七日の雑誌（『銃士』）に掲載され、一八五四年一月に『火の娘たち』に収録された。この二回の発表の間には数週間の隔たりしかないが、驚くべき異文がある。『銃士』ではナポリに滞在した年が一八三二年だと書かれ、『火の娘たち』では一八三五年となっている。読者は驚き、いぶかしがらる。「一八三二年と一八三五年のどちらが正しいんだ？」と。実はそのどちらも正しくない。ジェラールが最初にナポリに行ったのは一八三四年の秋で、ヴェスヴィオ山中腹のこの町を再び訪れたのは一八四三年末だ。

次に述べることをよく心に留めておこう。幾多もの伝記作家が探求し続けたように、ネルヴァル自身も自分が何者であるのかを探し求めている。ネルヴァルが開示してくれる彼の人生に関わる情報をなおざりにすべきではない。だが伝記を書く場合、これらの情報を慎重に扱い、できる限りの調査をして、豊富な情報源を注釈者に提示しなければならぬだろう。『幻視者たち』の序文で語られる「回想」を検討すると、それがよくわかるだろう。作品で人物描写の対象となっているアウトサイダーたちへの関心をもっともらしく語るため、ジェラールは彼が育った家の、危険な書物で満たされていた書齋の持ち主である、田舎の老いた叔父を持ち出している。ジェラールは幼くし

て「魂にとつては不消化で不健全な食物を吸収した」のだという。批評家たちは、この叔父とはヴァロワ地方に住んでいた母方の大叔父アントワーヌ・ブーシェだと特定した。なるほど、よからう。だがネルヴァルが六歳か七歳でヴァロワ地方を離れ、アントワーヌ・ブーシェが一八二〇年に亡くなったとき、ジェラルルは一二歳だった。作家ネルヴァルがそれほどまでに早熟で、このように描写されたような書齋をこの叔父は持っていたのか。社会規範から外れた蔵書を叔父に結びつけるやり方は、この時代の文学的なトピクスであり、『ルイ・ランベール』の「バルザックやスイスの作家ロドルフ・テプフェル^⑦も用いている。この危険な蔵書があつたのはパリだと考える方が真実に近いだろう。父親の家、あるいはジェラルル・ヴァサル博士という心霊主義者でフリーメーソンの代表の蔵書とする方がさらに真実味がある。ジェラルルが「父方」のパリでの実体験を、「母方」のヴァロワ地方へと移している理由に言及するのは、注釈者の仕事なのだ。

ネルヴァルの一人称作品を留保付きでしか用いてはいけなさとすると、ジェラルルが生きた時代の人々が残した証言から情報入手する必要があるだろうか。その場合も同様に批評的な姿勢が求められる。フィロクセーヌ・ボワイエは、ジェラルルが一八四三年三月七日、ユゴー作『城主』の初演時に劇場にいたと書いているが、悪気があつて間違えたのではないだろう。なぜならネルヴァルは同時にカイロとパリにいることはできなかったのだから。だがそれ以外に、油断しているうちに情報が

間違っていたり、事実が歪曲されたりすると、その間違いを正すのはさらに難しい。アルセーヌ・ウーセーは『アルチスト』誌の編集長だった。一八五五年^{〔ネルヴァルの没年〕}の前の時期にも、後でもジェラルルの仕事を利用した。一九世紀末に書かれた回想には『私の筆の歴史』と控えめな題がついているが、その中で『迷子の小道』の冴えない詩人であるウーセーは、『文学的殉教者』という署名のない誹謗文書の作者がネルヴァルであると記している。一八四七年に、剽窃の告発に対して、この文書はなんとウーセーを擁護していた。ネルヴァルの良き友であるゴーチエ、『善良なテオ』はジェラルルの死後、『ファウスト』の若きフランス語翻訳者を讃えるため、ゲーテ自ら「大理石の手^⑩」手紙を書いただろうと述べている。その手紙を見てみたいものだ。ネルヴァルがリュシアン・ボナパルトの孫であるマリ―ド・ソルムに宛てて書いたと言われている手紙も同様に見てみたいものだ。ネルヴァルの死後、かなり経ってから、マリ―は、情熱的な手紙、涙なしでは読めない詩句の数々を証拠品として、ジェラルルが「愛情と献身をもって彼女を崇拜していた」と断言しているのだから。引き合ひに出されている手紙と詩句はネルヴァルの手によるものとは似ても似つかないと、断言しなければならぬだろうか。^⑪ネルヴァルが真の愛情をあふれんばかりに持ち合わせていることを認めるにしても。

だからといって、ジェラルルの同時代人たちがみな、彼について間違いを犯しているとか、嘘をついているとか結論づけたりはしないようにしましょう。これらの証言を無視する

ことはできないだろう。ところが機嫌次第で、羨望から、あるいは、ただ単に目立ちたいという欲望によって、亡き作家ジェラルムについての話ができあがる。一八五五年二月十七日、ジェラルムの埋葬の数日後に、イポリット・バブーは『フランスの学芸の殿堂』の中で激しく抗議している。

嘆かわしい出来事だ。ジェラルム氏の死亡をネタにして、新聞・雑誌のコラム執筆者が相変わらず勢を振るっている。無遠慮な文章に耳を傾けてみたまえ。最初に誰かがざっくりその話をして、お国言葉で「ジェラルムは私の親友だった」と叫ぶ。そして次から次に、小耳に挟んだのだという逸話が山のように届く。ジェラルムの友達という奴がいつもおいしい役柄で登場するのだ。これらの逸話には、墓を踏み台にすることもいとわない、情け容赦のない慢心が読み取れる。

この点について、文壇には美点があるのではないことがわかる。他にも不都合がある。自分たちに注目が集まるように、「証言者」や自称証言者は自分たちの体験からではなく、それ以前に発表された話から、思い出話を引き出して、それを裏付けようとする。こうして伝説が作られ、人と作品について、不透明な層が積もっていくのだ。ネルヴァルに関して言えば、ジェニー・コロンの謎が典型的な例だ。伝記を書く時、ジェラルムの死後、「友人たち」によって仕掛けられた罠を避けるよう

に気をつけなければならぬ。「幻想詩篇」の作者の人格を明らかにしたいなら、それと平行して、ジェラルムについて語った人たちのことも知る必要がある。

作品の持つ伝記的な魅力について言えば、ネルヴァルは最晩年に「散策と回想」でこう説明している。「私は、人生が、その存在を世に知らしめた作品と密接に結びついている作家の一人である」と。このように二つの伝記が書けるだろう。一つは、事実のみを考慮する伝記である。しかし真実だと証明される事実というのは稀であるし、基礎的な年譜しか描けないだろう。もう一つの伝記は、夢が反映されたものとして、作品を考察する伝記であり、脈絡のない話をも許容してしまう。ネルヴァル自身、二重の人生を意識していた。ストラスブルで、ドイツへの最後の旅行の前に、ウジェーヌ・ド・ミルクールが自分の伝記を書き、彼のことを「小説の主人公」として扱っていたことを知って、父親にこう書いている。「人々に語ることをやめさせることはできません。こうして歴史が綴られるのです、それにつけても、ぼくは自分の人生を、詩的人生と実人生に分けておいてよかったです」。プルーストはこの考え方に感銘を受けたであろうし、彼はまた、ネルヴァルの作品を知的かつ繊細に解釈した最初の人物となった。そして真正正銘を目指す伝記作家は慎み深くなければならぬことを、この言葉は示している。

この「詩的人生」を示して、よく知られていない「実人生」の中に慎重に書き入れることこそ、本書の意図である。たまた